胞で 2n=22 であることを報告した。核型は 16m+6sm である，なお，ヌスビトハギおよびケヤブハギについては既に 2n=22 およびヌスビトハギでのみ 2n=24 が知られていたが，今回のわれわれの結果は 2n=22 であった。核型は両亜種ともに 14m+6sm である。

3. ヌスビトハギ節に属する種類の核型はいずれもよく似ており，近縁であることが示されているが，染色体の大きさには明らかな相違がみられる。22本の合計の長さで比較してみると，短かいものからヌスビトハギ，マルバヌスビトハギおよびケヤブハギ，リュウキュウヌスビトハギ，フジカンゾウの順で長くなっていた。外部形態，花粉および地理的分布にもとづいた結論 (Ohashi 1973) と比較すると，長い染色体（すなわち大形のもの）をもつ種類ほど原始的であると考えられる。

4. 調べたすべての細胞では，22本の染色体のうちの2本（いずれも sm で，大きいものから順に11から14番目のもの）は動原体附近で切れやすいことが認められた。

終わりに，本研究に用いた材料の収集に協力していただいた東京大学総合研究資料館植物部門立石庸一氏，同理学部附属植物園邑田仁氏および国立科学博物館門田裕一氏にお礼を申し上げる。

□鈴木　進：**原色すみれ** 209 pp.（内 pls. 160）. 1980. 家の光協会。¥1,600. スミレの図譜も何部か有るが，これは原色写真を集めたもの。種，変種，花色や班入りの変異を網羅し，その後に，人工交配や天然の雑種などで発見したものを載せているので，仲々見応えがある。終りに，分類，分布，性質，観賞のための栽培法，用土，鉢，植え込み方法，肥料，病害虫などを記す。寄植えにハイユキソウがよいとか，ナメクジは使用済の注射針でさすとよいとか中々穿っている。本書をみて *Viola* の節がほんとうに普及したとしみじみ思われる。末尾にそえた自然状態における交雑の組合せ，人工交配による組合せの表は大変参考になる。（前川文夫）

□山本　正・高畑　滋・森田弘彦：**北海道山菜誌** 256+8 pp. 北海道大学図書刊行会. ¥1,200. 異色の山菜誌である．北海道農業試験場に勤務される三人の合作で，山本氏の退官記念出版物でもある。三人の異なる特色が，ことに第一部の3個の文章によく出ている。高畑氏の山菜の章は山菜の意味を理解し，森田氏の植物学からみた山菜はカタクリを例にとって述べ，山本氏の山菜文化史では，トコロを土台に，現代の状態から徳川，万葉と逆に追い上げて行って，山菜を仲介としての人間とのふれ方に当って行く。第三が特に面白い。

第二部は三人が原稿を廻り持ちして書かれたもので，45種類しかあがっていないが，さすが，北に偏した北海道としての主材の良さが目にうつる。記事も手慣れた感じで肩がこらずによめる。近来にない一冊である。（前川文夫）